

## 掲載コンテンツのご紹介

平成24年度に全国から応募されました地域文化資産映像を、審査委員会にて分野別・地域別を考慮し厳正なる審査を行いました結果、22本の地域映像が選定されました。

以下に22本の地域映像の概要をご紹介します。実際の映像は「地域文化資産デジタルコンテンツ発信事業ポータルサイト」にてご覧頂けます。

(平成24年3月31日までに合併予定の市町村については合併後の市町村名を記載しています)



### いわてけん しずくいしちよう ちいき いき しずくいし 岩手県 雫石町 地域に息づく雫石よしやれ

およそ420年ほど前、雫石を居城にしていた斯波(しば)氏は、用水を地下水路を使って引き、これを発見させまいと茶屋を設け美人の女将(おかみ)に見張らせていた。城の攻略を狙っていた南部氏の軍勢は、隠密を使って探索。隠密は茶屋の女将に言い寄り水路を聞き出そうとしたものを見破られ、退散したという。これが「雫石よしやれ」の起りりと伝えられている。古くは酒の席で歌い踊られてきた酒盛り歌の一種であったが、明治初期、屋号(やごう)普請場(ふしんば)の村上松太郎(むらかみまつたろう)が歌や踊りに手を加え、格式を高くしたと言われている。「雫石よしやれ」は現在でも祝いの席では欠かせない踊りである。一方、昭和初年に下田中勇(しもたなかいさみ)が、踊りに手を加え、舞踏団を率いて各地に広めたものが「南部よしやれ」の元になっていると思われ、民謡民舞が盛んになり、多くの団体に受け入れられて「南部よしやれ」が全国に広がっていった。本編では、町内3つの保存団体の映像記録のほか、毎年8月15日に、商店街を会場に開催される「雫石よしやれ祭り」や、「南部よしやれ全国大会」の出演者も取り上げ、雫石よしやれを多方面から見る事が出来る。



### いわてけん いちのへまち とりごえ たけざいく 岩手県 一戸町 鳥越の竹細工

一戸町鳥越には古くから竹細工が伝えられている。その始まりは平安時代といわれ、鳥越に滞在中の慈覚大師(じかくだいし)が、在る日、観音さまから竹細工を里人に広めよとの啓示を受け、これを伝えたとの伝説が残されている。記録としては、江戸時代の盛岡藩の「御領分物産取調書(ごりょうぶんぶつさんとりしらべがき)」に記載があることや、18世紀後半の盛岡藩の「封内郷村志(ほうないごうそんし)」に、「鳥越のシノの手籠…」などの記載があることから、当時この地方で間違いなく竹細工が行われていた根拠とされている。竹細工の材料はこの地方で採れるシノスズタケである。この竹を使って様々な編み方が工夫された。映像では、スズタケの採取から、その加工、更に様々な編み方とそれによって生み出される網目の美しさ等を紹介している。昭和61年には130人程の作り手がいたが、平成20年にはわずか55人となってしまった。



### やまがたけん かほくちよう かほくちよう でんとうぶんか 山形県 河北町 河北町の伝統文化

昔この地方では紅花(べにばな)が盛んに栽培され、近くを流れる最上川の舟運(しゅううん)によって、上方(かみがた)に運ばれ、見返りに雛人形(ひなにんぎょう)がもたらされた。毎年4月2日・3日に「ひな祭り」が行われ、「ひな市」と呼ばれる露店が並び、旧家には昔から伝わる雛人形が飾られ、大いに賑わう。両所(りょうしょ)地区には、ユーモラスな表情のお面を付けて踊る「弥十郎系」の「両所田植踊り」が伝わり、押切(おしきり)地区には、棒で地面をつついて踊る「てで棒系」の「押切(おしきり)田植踊り」が伝わる。溝延(みぞのべ)地区の「溝延八幡(みぞのべはちまん)神社」には「倭楽(やまとがく)」が伝えられ、楽人(がくじん)が雅楽(ががく)を演奏する。沢畑(さわばた)地区では、台風のシーズンである二十日の8月31日に「沢畑風祭り(さわばたかざまつり)太鼓」が行われ、「上沢畑(かみさわばた)若衆会(わかしゅうかい)」と「下沢畑(しもさわばた)若衆会」が太鼓の打ち合いを競う。また岩木(いわき)地区では、雨乞い(あまごい)と稲の豊作を願う「岩木豊年太鼓(いわきほうねんだいこ)」が打ち鳴らされる。毎年秋9月には「谷地(やち)どんが祭り」が3日間に亘り行われる。「谷地八幡宮(やちはちまんぐう)」では、1,100年以上の歴史を有し、日本4大舞楽に数えられている「林家舞楽(はやしけぶがく)」が奉納される。「谷地奴(やちやっこ)」は、神輿渡御(みこしとぎよ)行列で先頭を務める奴振りで、その勇壮な「振り」と「掛け歌(かけうた)」は他に類を見ない。その他に9基の囃子屋台(はやしやたい)が街を巡り、祭りを華やかに盛り上げる。



### いばらきけん ひたちおおたし まちだひけしぎょうれつ ものがたり いばらきけんしていむけいみんぞくぶんかざい 茨城県 常陸太田市 「町田火消行列」物語 茨城県指定無形民俗文化財

町田火消行列は、6年に一度開催される西金砂神社の小祭礼の行列に供奉し、祭場に入る先導を務める。火消行列が小祭礼に供奉するようになったのは、延享2年(1745年)の小祭礼からである。その前の元文4年(1739年)の小祭礼の際に、2か所から火災が発生して大混乱に陥った状況を見た町田の医師の土岐千角(とぎせんかく)は、長崎で修業した帰途に、江戸の神田明神の祭礼で神輿に供奉する火消組を見てその壮観さに感銘を受け、祭礼の行列に火消組を参加させる必要性を説き、千角の指導で神田明神を手本として延享2年の小祭礼に初めて供奉した。行列の中心となるのは、本来は若衆と呼ばれる15才から41才までの男子で、まとい振り・とびなどのさまざまな役に分かれている。総勢約100名の行列がそれぞれの衣装をまとい、独特の動作と掛け声をもって行進する姿は、いわば男気を見せる場でもある。



いばらきけん かしまし きたき あんばやし  
茨城県 鹿嶋市 木滝の阿波囃子

高松(たかまつ)地区木滝(きたき)は、鹿嶋市の南端部に位置しており、縄文時代から人が住み始めたところである。木滝には国内最古級の製鉄遺跡である比屋久内(ひやくうち)遺跡が見つかっており、奈良時代に編纂された「常陸国風土記(ひたちのくにふどき)」には関連する記載がみられる。江戸時代には水戸と銚子の飯沼親音(いぬまかんのん)を結ぶ鹿島街道筋に当たり、人々の往来は頻繁であり、コメもよく取れた、比較的豊たかた芸事も盛んな地域であった。この高松地区木滝(きたき)に幕末の頃、芸座連(げざれん)(=お囃子等をする人の集まり)が出来たとされ、「阿波囃子(あんばやし)」が演じられていた。この「阿波囃子」は、隣接する千葉県香取市佐原(さわら)に伝わる日本三大囃子の一つである「佐原囃子(さわらばやし)」にも影響を与えたとされている。この「木滝の阿波囃子」を何とか再現して継承できないかというのが、地域の人々の課題である。そこで今となっては唯一この“囃子”を知る土地の古老に教えを請うこととなった。関係者の大変な努力の結果が実り、再現が叶い芸座連の発表の日を迎えた。



いばらきけん ひたちおおみやし ひたちおおみやし まつ ぎょうじ  
茨城県 常陸大宮市 常陸大宮市の祭りと行事

小田野口火伏せ: 冬の季節、火災を防止する火伏せの行事が行われる。吉田八幡神社のお札を所定の辻に納め、火ばたきを模した藁束とまといを表わす“さんだわら”(俵のふたの部分)で飾り参加者が参拝する行事。檜山地区妙蓮寺のお会式: 木曾山妙蓮寺は西暦1300年の開基とされる。宗祖日蓮上人の命日の法要のものをお会式と言い4色の餅や野菜で堂内の柱を飾り法要を取り行う行事。入本郷のゴダチ: この地方に伝わる幼児から少年への通過儀礼に際し石を持って霊山に参拝するしきたり。参拝迄の数日、精進潔斎するが、これをオショウジン又はゴダチと言い、現在は稀に行われ簡略化されている。野口館の念仏講: 昔は毎月当番の家に集まり老人達が念仏を唱和し念仏講を行っていたが、今は年2回、地域の集会場での講を行う。大念珠を繰りながら念仏を唱える昔ながらの作法である。十二所神社の九頭祭: 小田野地区の十二所神社は九頭と呼ばれる9軒の家によって祭礼が行われてきた。そのしきたりは中世から近畿地方でみられる宮座の形態を色濃く残している。緒川地域と美和地域の六字様: 六字とは、南無阿弥陀仏の6文字のことで、江戸後期より盆の行事として疫神除けや無病息災を願い花飾りを持って村を廻る行事。西金砂神社小祭り- 諸沢地区の対応: 72年毎の大祭礼は7日をかけて日立市水木浜まで、6年毎の小祭礼は4日をかけて常陸太田の馬場町まで行列を組んで神幸する。これら祭礼を支える4つの氏子集落の一つ常陸大宮市諸沢の小祭礼への対応について紹介している。



さいたまけん ぎょうだし まみづか ししまい  
埼玉県 行田市 馬見塚の獅子舞

埼玉県の北西部にかつて馬見塚村(まみづかむら)があった。今からおよそ250年前、この地で、五穀豊穰(ごこくほうじょう)、悪魔除け(あくまよけ)を願って「馬見塚の獅子舞」が始まったと伝えられる。獅子舞は、法眼(ほうがん)、雌獅子(めじし)、雄獅子(おじし)の三匹獅子舞である。他に面化(めんか)、花笠(はながさ)、道化(どうけ)などと、“釣鐘”“大蛇等”の小道具も登場する。毎年9月神明社(しんめいしゃ)の例大祭(れいたいさい)でこの三匹獅子舞は奉納される。まずは例大祭の儀式が行われ、獅子舞へのお祓いがすむと、社前で「棒術」や獅子舞の「おかざき」「花がかり」等が舞われ、次いで、万灯(まんとう)、旗等を加えた行列が村に繰り出す。途中「諏訪神社(すわじんじゃ)、では「稲穂(いなほ)」を、「薬師堂」では「おかざき」、不動明王では「ブンナグリ」を舞う。西善院(さいぜんいん)では、釣鐘と大蛇が登場し「安珍・清姫(あんちん・きよひめ)」でお馴染の「鐘巻(かねまき)」が演じられる。その後、行列は神明社へ戻って例大祭は終了となる。



さいたまけん ちちぶし しろう まつ  
埼玉県 秩父市 白久のテングウ祭り

秩父盆地の南部に位置する荒川(あらかわ)白久の原(はら)地区では、毎年秋になると、子供たちだけで「テングウ祭り」を行ってきた。かつては他の多くの地域でも、行われてきたが、近年少子化の影響でこの行事がすたれてしまった。白久の原地区では、保存会を結成しこの行事を継承し、大人も手伝うようになった。「テングウ」の由来ははっきりしないが、昔からこの地域には“山の神”“火伏せの神”として天狗信仰があったことから、その“天狗”が変化したものではないかの説もある。一か月前から準備が始まる。材料を山から切り出し、高さ8m程の三角錐形の「大天狗」と隣接して3坪ほどの四角い「天狗小屋」を作る。子供たちはこの小屋を拠点に、各家々を回って、“お灯明料(とうみょうりょう)”を集め、これで菓子等を買う。夕方になると“せえーのー”“菓子をくれるぞおー”と大きな声を張り上げ、集まった人々に菓子を配る。その後、この小屋に火をかけ、炎が天を焦がすほどの勢いで燃やすことで祭りを終える。



さいたまけん あげおし あげお たけざいくしょくじん  
埼玉県 上尾市 上尾の竹細工職人

上尾市緑丘に一軒の竹細工店があった。店の主人、鴨田安五郎(かもたやすごろう)氏の竹細工技術は、平成19年3月1日、上尾市無形民俗文化財として登録された。西暦1716年の南村(みなみむら)指出帳(さしだしちょう)の記録により、少なくとも江戸時代中期にはザルづくりが行われていたことがわかる。竹製品は生活必需品であり、生産地と消費地が近接する製品であった。この頃の竹細工は専門者に依るものではなく、農業従事者が余業として必要に応じて行っていた。一時期、需要の拡大と共に、これを専門とするものが現れたが、需要の減少によってその数は減少、ついに鴨田氏一人となってしまった。映像では鴨田氏による、「小カゴ」「ザル(草取りビク)」「熊手(くまで)」の制作過程を紹介していて興味深い。平成24年2月、鴨田氏が逝去されたのに伴い、「上尾の竹細工技術」は登録解除となった。



さいたまけん みさとまち ひろきばんば どうそじん や  
**埼玉県 美里町 広木万場の道祖神焼き**

毎年、美里町広木万場地区では、小正月の行事として、「道祖神焼き(どうそじんやき)」が行われている。この行事は江戸時代から絶えることなく継承され、かつては子供達で行ってきたが、少子化に依り、最近では保存会の大人が手伝っている。全国各地で行われている「どんど焼き」と時期を含めかなり似た行事である。まず、山から切り出した木や落ち葉、藁(わら)等で高さ3m程の円錐形に積み上げる。地下を掘って空洞を作り、子供が4、5人入れるようになっている。その後、子供達は「お飾り(おかざり)、お賽銭(さいせん)集め」と言って家々を廻り、正月行事で飾った、「お札(おふだ)」「ダルマ」「正月飾り」「門松(かどまつ)」等をおつめて、小屋の周りに飾り付ける。そして今度は「道祖神やきも一す」と子供達が触れて回る。人々が集まる中、子供達は中に入りお供えをして「手打ち」をし、火を付ける。燃え落ちた熾き火(おきび)で、まゆ玉を焼く、これを食べると一年を無病息災(むびょうそくさい)に過ごせると伝えられている。



とやまけん いみずし しもむらか もじんじや ねんじゅうぎょうじ  
**富山県 射水市 下村加茂神社の年中行事**

射水市にある下村加茂(しもむらかも)神社に伝わる多くの神事は、平安時代の西暦1,090年に、京都賀茂御祖(かもみおや)神社(下鴨神社)の荘園がこの地に置かれことになむ。  
 毎年5月4日、当社社では春の例大祭が行われ、「やんさんま」「流鏝馬(やぶさめ)」がなまつたとされるが行われる。この流鏝馬(やぶさめ)は全国で約120か所に伝わる中でも最も平安時代の様式を残すとされている。「御田植祭」は6月の初卯の日、真菰(まこも)を刈って、人形を作り境内の御旅所(おたびしょ)に御祭神「玉依姫命(たまよりひめのみこと)」を迎え、神事を行う。お旅所前の仮田で、田植の所作を官司が行い、平安時代から伝わる「後退植え」(後ろにさがりながら植える)をする。「稚児舞(ちごまい)」は8月の盆を過ぎた頃、10・11歳の少年4人が選ばれ「稚児舞」の稽古が始まる。9月4日、この「稚児舞」が特設舞台上で奉納される。演目は9曲で全体で3時間余にも及ぶ。  
 「鱒(ぶり)分け神事」は、元日の「新年慶賀祭(しんねんけいがさい)」で行われる。供えられた塩鱒(しおぶり)と鏡餅は神事の後に切り分けられ、全ての氏子(うじこ)の家に分けられるが、これは「神人共食(しんじんきょうしょく)」の意味があるという。



いしかわけん か が し か が し みんぞくげいのう  
**石川県 加賀市 加賀市の民俗芸能**

石川県の最南端に位置する加賀市は、近世には加賀藩の支藩・大聖寺藩(だいしょうじはん)が置かれ、藩政期に形成された文化は今日に色濃く継承されている。この作品では、今に伝わる7つの伝統芸能を紹介している。  
 「お松囃子」は、謡い初めの行事で、江戸期には幕府・諸大名により盛んであったが、衰退。当地では最後の藩主がこの伝統を確固たるものとしたため、弟子たちにより伝えられた。「御願神事(ごがんしんじ)」は、「菅生石部神社(すがういそべじんじや)」で、およそ1,300年前からつづく勇壮な神事で、毎年2月10日の例祭時に行われる。壮烈な竹割りの行事と、大蛇退治に擬するという大縄の行事からなる。「シャヤムシャ踊り」は、塩屋町(しおやまち)に伝わる別名「蓮如(れんによ)踊り」と呼ばれる盆踊りである。「シャヤムシャ」は笹叢(ささむら)が語源ともいわれ、笹をかき分け御坊に参る様子を振りにしたともいう。「山中節(やまなかぶし)」は、北前船(きたまえぶね)の船頭衆(せんどうしゅう)が山中温泉で湯治の際に歌った松前追分(まつまえおいわけ)から発展したといわれている。「ごり呼び唄」は、動橋町(いぶりはしまち)で歌い継がれるわらべ歌で、川魚のゴリを捕まえるときに唄ったという。「黒崎土ねり節(くろさきどねりぶし)」は、藩政時代に遡る。黒崎町(くろさきまち)での新田開発に伴う労働歌が由来とされる。「敷地天神蝶の舞(しきじてんじんちょうのまい)」は、前述の「菅生石部神社」にて毎年7月24日から26日にかけて行われる夏祭り「天神講(てんじんこう)」の際に、氏子(うじこ)の少年たちによって奉納される稚児舞(ちごまい)で14世紀には既に行われていたとも伝わる。



いしかわけん し でんとうぎょうじ きずな  
**石川県 かほく市 かほく市の伝統行事「絆」**

白尾のホラホイ行列: 白尾住吉神社の宵宮行事の一つとして、北海道まで出漁するようになった大正以降行われている旗竿40本を持ち街を練り歩く行事。ホラホイとは「イササホイ ヨイトナー」という行列の掛け声から採られたと言う。  
 内日角・大崎の奴行列: 内日角の奴行列は八幡神社の秋祭りの宵宮の一環で行われる挟み箱を中心とする奴振り行列である。大崎の奴行列は榊原神社の秋の例祭として挟み箱、毛槍、長刀を中心に16人で行なわれる。夜、神輿が神社に還御する際の還幸祭が見所。高松のヤッサン踊り・額神社の秋季例祭時に地区内で踊られてきたが一時途絶え、平成14年に復活した。由来は定かでないが踊りの音頭である門出八島の中に「ヤッサン」の掛け声が入ることでそう呼ばれている。内日角・指江・狩鹿野の虫送り: 昔、稲の害虫駆除で火を燃やして集まる虫を駆除したことが始まりとされ、この地域では毎年夏の行事である。内日角では藁で作った松明を振り回しながら竹を芯に藁を積み上げた大松明に火をつける。指江では竹筒に灯油を入れた竹松明を子供が持ち運ぶことで、又、狩鹿野では藁で作った子供の背丈を越える様な松明を運ぶのがそれぞれの特徴である。中沼の花火: 中沼地区では地元の矯風会が資金集めから打上まで関与し花火大会を行っている。八幡神社の秋季例祭で神輿や獅子舞に続き1300発を打ち上げる。木津の吹き出し花火: 木津の神明神社に伝わるこの花火は、秋季例祭に神輿や獅子舞と共に行われる。花火は木津煙火保存会により作られ、竹筒に仕込んだ火薬に点火し炎を噴き出すのが主となり、他にブドウ花火等もある。



あいちけん とよたし つぼさき ひ しんじ  
**愛知県 豊田市 坪崎の火きり神事**

豊田市の山奥に坪崎集落がある。かつては100人を超える人々が暮らしていたが、今は6世帯12人のみとなった。ここに津島(つしま)神社の神事として「火きり」と称される伝統神事が伝えられている。「火きり」は、「火きり臼(うす)」と「火きりキネ」とを擦り合わせ、摩擦熱で火をおこすことをいう。摩擦熱を植物の乾燥させた繊維「火口(ほくち)」に移し、「つけ木」に移して、更に赤松で作った「松明(たいまつ)」を燃やす。一方この神聖な火で、炉端に用意された「小豆飯(あずきめし)」を炊き、これ食べて、1年の「無病息災」を祈る。このような「火きり神事」は伊勢神宮や出雲大社では、現在も行われているが、この地で行われているのは、大変珍しい。昭和34年、愛知県無形民俗文化財に指定された。



ならけん おおよどちよう おおよどちようでんとうさいじき  
**奈良県 大淀町 大淀町伝統歳時記**

大淀町に伝えられる多くの伝統的な行事について、その祭りや習俗など殆んどを網羅し紹介しているが、ここでは全ての内容を説明できないので、以下にその行事名と地域とを上げる。  
 「どんど」～大岩(おおいわ)～、「毘沙門祭(びしゃもんまつり)」～薬水(くすりみず)～、「柳の渡し祭(やなぎのわたしまつり)」～北六田(きたむた)～、「権現祭(ごんげんまつり)」～今木(いまき)、「聖徳太子報恩大会(しょうとくたいしほうおんたいえしき)」～上比曾(かみひそ)～、「鮎供養(あゆくよう)」～下淵(しもぶち)～、「水神祭(すいじんまつり)」～下淵～、「お水取(おみずとり)」～吉野川(よしのがわ)～、「牛滝祭(うしたきまつり)」～馬佐(ばさ)～、「十二振り祭(じゅうにふりまつり)」～桧垣本(ひがいもと)～、「今木甲神社(いまきかぶとじんじや)の秋祭」～今木甲神社～、「子ども相撲」～岩壺葛上神社(いわつぼくずかみじんじや)～、「お仮屋たて(おかりやたて)」～佐名伝(さなて)～、「いのこ」～上比曾(かみひそ)～、「カンジョウ縄(なわ)」～畑屋(はたや)～、「ちびっ子桧垣本座(ちびっこひがいもとざ)」～桧垣本猿楽(ひがいもとざるがく)～、「世尊寺寺宝(せそんじじほう) 現光寺縁起絵巻(げんこうじえんぎえまき)」～上比曾世尊寺(かみひそせそんじ)～



ならけん そにむら そじ ししまい う つ わざ こころ  
**奈良県 曾爾村 曾爾の獅子舞 ～受け継がれる技と心～**

奈良県の東北部、三重県との県境に曾爾村はある。地域を「伊勢街道(いせかいどう)」が通っており、昔「お伊勢参り」が盛んであった。曾爾村の獅子舞は、伊勢の国(現在の三重県桑名市)で習い覚えたものと伝えられる。曾爾村には3つの地域が在り、それぞれ個性的な獅子舞を演ずる。「獅子踊り(ししおどり)」長野奉舞会(ながのほうぶかい)、獅子の他に「天狗」「おかめ」「ひよっこ」等が加わり最も早くから獅子舞を始めた。「参神楽(さんかぐら)」今井奉舞会(いまいほうぶかい)、ゆったりとして優雅で洗練と格調を感じさせる舞は見ごたえがある。「接ぎ獅子(つぎじし)」伊賀見奉舞会(いがみほうぶかい)「台」と言われる大人が下になって、肩に子供を乗せて舞うので「接ぎ獅子」と呼ばれる。曲芸的な要素を持っている。舞台は「門僕(かどぶさ)神社」、それぞれの演舞が終わると、3奉舞会合同で「荒舞(あらまい)」を舞って終了となる。



わかやまけん たなべし へいじかわ なぎなた おど わかやまけん たなべしほんぐうようほんおど  
**和歌山県 田辺市 平治川の長刀踊り ～和歌山県田辺市本宮町盆踊り～**

古来より熊野三山(くまのさんざん)の熊野本宮大社(くまのほんぐうたいしや)にお参りする人は多かった。この近くの山間(やまあい)の平治川には、「源平の戦い」に敗れた平氏の「落武者(おちむしや)」が住み着いた。この集落は他地域に集団移転したが、その子孫たちは先祖の供養のため、「長刀踊り」を行ってきた。昭和48年には、和歌山県無形民俗文化財に指定され、現在は「保存会」が中心になって継承に努めている。踊り手は「長刀(なぎなた)」を持って源平を現す紅白の襷(たすき)をかけて踊り、お囃子は「唄」と「太太鼓」「小太鼓」である。「唄」何故か源氏方である「那須余一(なすのよいち)くどき」が唄われる。



おokayまけん せとうちし ひぜんやきおがま さいげん  
**岡山県 瀬戸内市 備前焼大窯の再現**

この映像は、平成23年度、本サイトに掲載した「備前焼大窯の再現」シリーズ「53メートル大窯による窯詰焼成(かまづめしょうせい)試験」と共にご覧いただくことをお勧めしたい。  
 本映像では、まず燃料作りから始まる。そして大窯(おおがま)構築の最終段階ともいえる作業に入っていく。窯の中に土が運び込まれ「窯床(かまどこ)」が整備される。大窯は傾斜して作られているので、上部の窯床は階段状につくられる。「けど」(煙道部)が作られる。微妙な立体的曲線を得るため、まず竹枠で型がつけられ、それに沿って煉瓦(れんが)が積み上げられる。最後に「噴出し部(ふきだしぶ)」が構築され、いよいよ大窯の構築が成った。慶日(けいじつ)、「空焚(からた)き火入れ神事」が取行われ、大窯に火が入る。約3週間窯が焚かれ、無事大窯の温度が1200度に達した。



ながさきけん ひらどし おぎたふりゅう  
**長崎県 平戸市 荻田浮立**

平戸市田平町(ひらどしたびらちよう)、この九州最西端の地に「荻田浮立」が伝えられていて、「三柱(みはしら)神社」に三年に一度奉納されている。「三柱神社」は、1780年頃にはすでに鎮座されていたと伝えられる。「荻田浮立」は1850年ごろ、浮立の盛んな地域まで出向きこれを習い覚えたと言われている。神社への奉納がある年は、「鉦起し(かねおこし)」と称して6月に練習を始め、7月には神社に「願立て(がんだて)」(≒豊作祈願も兼ねて)を行い、10月の「お願成就(おがんじょうじゆ)」奉納の日を迎える。奉納には「棒術(ぼうじゆつ)」の演技も行われ、日頃の修練を披露する。終了後、境内の棧敷(さじき)という場所で(屋外)家ごとに客をもてなす直会(なおらい)が行われ、これも珍しい。その他、本編には、「鳴り物(なりもの)部門」「舞踏(ぶとう)部門」も細かく解説されている。



おおいたけん なかつし なかつぎおん きたばるにんぎょうしばい  
大分県 中津市 中津祇園 北原人形芝居

中津祇園は疫病退散(えきびょうたいさん)、無病息災(むびょうそくさい)を願って、毎年7月末頃に開催されている。歴史は古く、約580年前、京都の八坂(やさか)神社から祇園のご分霊(ぶんれい)を勧請(かんじょう)したことから始まった。中津神社を中心とした“上祇園(かみぎおん)”と、間無浜(くらなしはま)神社を中心とした“下祇園(しもぎおん)”からなっている。現在では上祇園・下祇園あわせて12台の“祇園車(ぎおんぐるま)”と2台の“御神輿(おみこし)”が旧中津城下町を巡り、祇園車の舞台では華麗な民舞等が奉納され、各神社の境内では夜、「練り込み(ねりこみ)」が行われるなど優雅さと勇壮さを兼ね備えた祭りである。

およそ700年前から中津市北原(きたばる)地区に伝わる人形芝居である。大分県の無形民俗文化財に指定されている。昔、鎌倉幕府執権を退いた北条時頼(ほうじょうときより)が諸国を巡検し北原にやってきた時、病に倒れてしまった。親切な村人達の看病に依り回復し、村人達はお祝いに、祝いの踊りや、手の甲に眼と鼻を描いて人形のようにした芝居を見せた。時頼は大変喜び、「海にも添わず山にもつかぬ土地柄ゆえ、踊りを業として渡世せよ」と村人達に伝え、それが始まりだと伝わっている。毎年2月の第1日曜日に、原田(はらだ)神社にて行われている。現在この伝統芸能を支えているのは、北原人形芝居保存会や三保小学校人形クラブである。演目は「翁渡(おきなわたし)」「傾城阿波の鳴門(けいせいあわのなると)」「伊達娘恋緋鹿子(だてむすめこいのひがのこ)」「日高川入相花王(ひだかがわいりあいざくら)」「絵本太功記(えほんたいこうき)」などである。



かごしまけん みなみきゅうしゅうし あおとぼうおどり  
鹿児島県 南九州市 青戸棒踊り

平成19年12月1日、顕娃(えい)町、知覧(ちらん)町、川辺(かわなべ)町が合併し南九州市が誕生した。この地には15~16世紀に築かれたとされる城跡など古くからの遺跡が存在し、またいくつかの郷土芸能も伝えられてきた。

「青戸棒踊り(あおとぼうおどり)」は青戸集落で継承されている棒踊りである。「トンカラカッ」と称されるのは“前踊り”。次いで青戸棒踊りは「鎌(かま)踊り」「中六尺(なかくしやく)踊り」「長刀(ながなた)踊り」の順に練り広げられる。

また、長崎集落では十五夜行事の一つとして「ごくだいまじゆい」の習俗が伝えられている。山から“萱(かや)”, “アケビ”, “カラスウリ” 様々な花などを採って飾り付け、子供がこれを頭から被り、集落を練り歩く行事である。その他に山から採ってきた“かずら”に萱を巻きつけて綱を作り、総出で綱引きを行う行事などが紹介されている。



おきなわけん たけとみちょう ふなうき ぼうねんさい しち  
沖縄県 竹富町 船浮の豊年祭と節祭

沖縄本島から南へ450Km、西表島に竹富町船浮(ふなうき)地区がある。ここでは2期作が行われ、6月には一回目の収穫が終わる。その収穫を祝って7月には「豊年祭(ぼうねんさい)」が盛大に行われる。まず、“神司(つかさ)による“願い”(にがひ)”が行われ、豊年祭の歌が奉納される。「やらよう」(船浮村に“弥勒の世(みるくゆ)”を願う歌)、「まいちば」(旅の無事を祈る歌)、「あばれ」(すばらしい日の意味)「仲良田(なからだ)」「肥沃な穀倉田の意)、奉納歌がおわると「チ又皿(さら)・ナカ皿(さら)」「(新酒を神司丹捧げる)をし、“棒術”が始まる。「パチカイ」「一番棒」「つき棒」「六尺棒」「がひゃ(鎌のこと)棒」「三人棒」「五人棒」で演武が終わる。その後は、獅子舞が行われ、神司の退場で幕となる。

節祭(しち)は毎年11月に行われ豊年祭に次ぐ一大行事である。“農民の正月”と言われ来年の豊作を祈る。まず、旗頭(はたがしら=いわゆる神社の幟)を立て、船浮御嶽(ふねうがん)に祈りを捧げ、次いで仲立家での神事を終えると「サバニ舟」での“舟こぎ”が行われる。幸せは海から来るというこの地方では重要な行事である。その後「アンガー」(祈願の歌)が始まる。舟子が円陣を組む中で、3人の女性が“祈願の歌”を歌う。その後「棒術」の演武があり獅子舞が行われ、終了となる。